



# 大いちょう

平成30年11月 1日  
さいたま市立高砂小学校

高砂小学校だより 平成30年度 No. 7

048(829)2737

## 秋の深まりとともに

校長 並木昌和

朝夕の涼しさが秋の深まりを感じさせてくれます。校庭の木々も少しずつ紅葉を始めました。

先日の音楽会には、ご多用のところ多数ご来場いただきありがとうございました。子どもたちの一生懸命さと澄み切った歌声に心が洗われる思いがしました。音楽は、一人が頑張ってもよいものになりません。みんなで心を合わせないとよいものになりません。そして、感動が他に伝わりません。広い意味で他とのかかわりを意識しないわけにいかないのです。子どもたちは仲間と心をつなげたかかわりを深めて成長します。楽しみです。

この時期になるとある年の同窓会を思い出します。皆それぞれに成長し、30代半ばです。結婚している者も多く、子育ての様子などを楽しそうに話してくれました。当時の思い出話や現在の様子などを話しながら、楽しい時間を過ごすことができました。「そういえば先生、Tさんにラーメンと餃子はもうおごりましたか。」と聞かれました。私が担任していた時に子どもたちと『1年間に本を20,000ページ読んだ人には、卒業する時に先生がラーメンと餃子をおごってあげる。』という約束をしていたのです。当時、Tさんだけが見事に20,000ページを読破し、私にラーメンと餃子をおごってもらう権利を獲得したのでした。(まったく、怒られた事やこちらの都合の悪いことはよく覚えているものです。)20数年も前の約束です。まだ守ることができていません。責められました。

彼女らと本や活字の話になりました。テレビ、インターネットやスマートホンの普及、また、最近では電子ブックの発達で、じっくり物語等を活字で読む機会が激減していること、ニュースさえも新聞で読む必要がなくなり、彼女たちの周りから活字が消えていることをはっきりと感じ取ることができました。このままでは「読書」という言葉もいずれ消えてしまうのではないかと思わなければなりません。

読書は、いろいろと考えて想像したり、時には言葉の美しさや表現の巧みに感動したりしながら、作者の創作の世界を味わうことができるものです。読書は豊かな感性や想像力を養う上で、極めて大切なものと言えます。心のしなやかな子ども時代の読書は、豊かな心や知性を育てる基になるものです。彼女たちに言いました。「先生も子どものころは読書するよりも外で遊ぶ方が好きだった。けれども、夢中になって本を読んだ時期もあった。君たちの子どもには、どうか夢のある話を読み聞かせてあげて欲しい。それがいつか心の豊かさとなって実を結ぶことになるよ。」と。

私は、小学生に勧める本はと問われると必ず「走れメロス」(太宰 治)を挙げます。何度読み返しても、その時の心もちによって異なった感想を持ちます。常に新鮮な気持ちになります。

静かな秋の夜長、家族で読書をするのもよいのではないのでしょうか。

子どもたちが、心震える、一生忘れることのできないような本に出会えることを望んでいます。

「ホッと一息 本と一息」(2018年度読書週間標語)